

INTERVIEW：インタビュー

読売ジャイアンツ球団特別顧問

高橋 由伸さん



東京六大学野球リーグではリーグ新記録となる 23 本塁打を記録し、1997 年読売ジャイアンツに入団。入団 1 年目から主力として活躍。2015 年にプロ野球選手を引退し、同年読売ジャイアンツの監督となる。現在は、野球評論家や読売ジャイアンツの特別顧問として多方面で活躍されている。

聞き手・構成：古橋 夏樹、富田 寛之、小峯 健介

—— 何歳頃から野球を始められたのでしょうか。

少年野球を始めたのは 4 年生ですね。

—— 小学生の頃から目立った選手だったのですか。

小学生から大学生のときまで、常に 1 年、2 年上の学年のチームに入っていました。

—— 中学のときは海外遠征のメンバーになっているのですね。

ポニーリーグの代表として、海外に行ったことはありました。

—— 高校 1 年、2 年と甲子園に出場されて、慶應大学でも 1 年生の春からレギュラーとして活躍されていましたが、プロ野球選手になろうと思われたのはいつ頃からでしょうか。

何となく意識を持ったのは高校生ですね。ただ、その頃はまだプロに行くことについて現実味を持って考えていたわけではなく、野球のスカウトが見に来たり、新聞、メディアに注目選手として取り上げられるようになったりして、周りから意識させられるようになったという感じです。桐蔭学園では、高校から直接

プロに行くことは少なく、まずは進学するという伝統のようなものがありましたので、高校生の頃は自分の中ではあまり意識はありませんでした。

実際に自分がプロ野球選手になろうと思ったのは大学 3 年生頃です。高校時代の先輩や大学に入ってから一緒にプレーしていた先輩がプロ野球の道に進んでいく頃だったのですが、大学の監督から、いいものがあるのにチャレンジしないのはもったいないと言っただいて、ちょっとずつ意識が高まっていきました。

僕は小さい頃から、プロ野球はもちろん、甲子園も六大学野球も、自分の知らない遠くの世界でやっているものだと思っていたので、ずっと野球を続けていくという意識はあんまりなかったんですね。

桐蔭学園に進学したことが後々野球を続ける一番の大きな出来事だったと思うし、他の高校に行っていたら野球を続けていたかはちょっと分からないと思います。

—— 高橋さんが大学 3 年生だった頃は、ネクストバッターズサークルに入るだけで大歓声がわき上がっていたことを鮮明に覚えています。

僕としては小さい頃から周りの人の期待に応えたいと思って野球をやっていたことが、一番のモチベーションというか、野球から逃げなかった最大の理由でした。球場に来て応援してくれる大学野球のファンに対して、僕自身も何かやりがいを感じていたかなとは思いますね。

—— 高校、大学、プロといろいろなステージで活躍されましたが、一番印象に残っている試合はありますか。

初出場とか初ヒット、初ホームラン、そういった、初めて成し遂げたものはだいたい覚えています。

—— 学生の頃は投手もされていましたが、今の時代であれば二刀流に挑戦していたと思いますか。

挑戦していたと思います。自分自身、投げることはできていたので、今だったら二刀流をやりたいと言っていたと思います。当時は、打者か投手のどちらかを選んでいくというのが当たり前という時代でしたので、打者に専念することに疑問を感じることもありませんでした。

—— 現役時代、高橋さんがライバルだと感じていた投手はいらっしゃいますか。

川上憲伸（元中日ドラゴンズ）と僕はずっとお互いに意識していたと思います。

お互いが引退してから聞いたのですが、川上は、キャンプ初日に星野監督から、高橋を抑えて新人王を取るんだということを意識させられていたようです。川上のそういった環境、周囲の期待に応えた彼の意識の高さや強い思いに、僕は1年目、負けたのかなと思います。

学生時代の対戦成績は、僕が打ったり、川上が抑えたりという感じで、ライバルとして意識させられました。そういった存在がいたというのはいいことだったなと思っています。

—— 高橋さんのバッティングについて、天才であるとか、

感覚的に素晴らしい選手だと評されていましたが、ご自身で思う自分のバッティングというのはどういったものでしたか。

僕は、すぐ目の前に松井秀喜さんという天才打者がいたということもあって、パワーで勝負するというバッティングスタイルにはせず、いかに体をうまく使って打つかということを大事にしていました。同じと言ったら失礼かもしれないですけど、王貞治さんがそうですね。王さんは、体格的にはそんなに大きくはないですが、うまく全身を使って遠くに飛ばすという観点からは、同じようなタイプだったのかなとは思います。

—— 高橋さんは、現役時代、多くの賞を取られています。一番誇りに思っている賞は何でしょうか。

オリンピックの銅メダルは特別だったと思っています。アテネオリンピックはオールプロで参加した初めてのチームだったので、絶対に金メダルを取らなくちゃいけないという思いで戦いに行きました。結果としては、負けて銅メダルになってしまいましたが、いい経験をさせてもらいました。とても大きなプレッシャーの中でプレーをしたので、もう1回挑戦できるかといわれるとわかりませんが、でも、そういった逃げられない状況に放り込まれて、それを乗り越える経験をするということは、必要なことだと今でも思っています。その中でメダルを取れたことは、ゴールドングラブ賞等の個人タイトルより大きな勲章になったという気はしています。

—— 松井秀喜さんが後ろ（四番）で打たれていて、メジャーリーグにも行かれて、きっと高橋さんにもそういう話は多く持ち掛けられたのではないかと思います。ご自身もメジャーリーグでプレーしたいと思うことはあったのでしょうか。

全くないです（笑）。当時は自分がプレーするような舞台ではないし、自分がプレーする場所というイメージが全くわかなかったんですよね。小さい頃、プロ

野球が遠くにあったような感覚と同じで、メジャーリーグは自分の世界ではない場所にあるという気がしていたんでしょうね。

だから松井さんとかイチローさんが行かれていましたが、あの人たちは特別なんじゃないかなと思っていました。自分にとって現実味がないという感じですね。ただ、ユニフォームを脱いでから、仕事でメジャーリーグを生で見たときに、「あ、もっと早く生で見ていたら違う気持ちを持っていたかもしれない」とそのときに思いました。

—— 監督を受諾された一番の理由は何だったのでしょうか。

一番の理由は、期待されたからです。僕の野球に対する一番のモチベーションというか、野球から逃げなかった最大の理由は、期待に応えたいという点にあります。小さい頃、最初に期待をかけてくれたのは親ですが、だんだん大きくなって、チームメイトに期待されるようになり、プロ野球選手になってからはファンから期待をかけてもらって、というように。

監督については、プロ野球選手になってからしばらくプレーして、そうすると何となく自分のやることがある程度認められて、将来的には監督に、という声が聞こえてくるわけですね。なので、いずれは自分も監督をやる日が来るのかなという、うっすらとしたものはありました。それと、30代中盤から後半ぐらいですかね。辞めどきは自分の中で探し始めていたと思いますが、かといって何か明確なものではなくて、そういったタイミングで、監督という新たな場所を与えられて、ああ、これがもしかしたら次のステップに行くタイミング、きっかけなのかなとは思いました。選手を続けられるならば、もっと、もっとやりたいというのは正直なところでしたが、選手は自分の意志だけで続けられるものでもないの、辞めるときが来ても悔いなく次に進めるために、悔いなくやっていたつもりでした。

だから、監督という次の新たなステージを与えられたときには、自分としては、選手は悔いなくやり切っ

たので、次の期待されたものにチャレンジしようと思ったんです。

—— ジャイアンツの監督のプレッシャーは特別ですか。

僕はジャイアンツの環境しか知らないの、他と比べることはできません。どこの監督も同じだと思うんですよ。でもジャイアンツというより、監督というのは優勝を背負うことが仕事なのかなとは思っていますね。育成か、優勝か、どちらかだけに注力すればいいわけではなく、両方に全力を注がなくてはならない。

—— 大変なプレッシャーの中で監督を務められたと思うのですが、どのようにしてプレッシャーに打ち克っていたのでしょうか。

打ち克ってはいなかったと思います。逃げ道がないだけです。逃げ道がないと言ったらあれですけど、プロ野球選手になったときもそうでしたが、あまりこの道を進みたくないと思うことすらありましたけど、自分がその時点で立っていた場所を考えるとそれも現実的ではないですし、もう受け入れざるを得ないというだけであつたと思います。

—— もし他球団から監督のオファーが来たらお請けになりますか。

現実的に難しいとは思いますが、ノーとは言いたくないなと思っています。自分の可能性を狭める必要もないと思いますし、期待されることが一番のモチベーションになっていて、今やっていることが評価されるからこそ他球団からの依頼も来るとは思っているの、ノーと言うことで、自分の可能性や選択肢を減らすことはしたくないなと思います。

—— 弁護士に対してどういったイメージをお持ちでしょうか。

守ってもらえるというか、困ったときに頼るイメージですね。本当はそうではないこともたくさんあるとは思いますが。

弁護士という職業を当然知ってはいるけど、あまり弁護士を必要とすることがこれまでなかったのかなと。

—— 弁護士を必要とすることがなかったというのは、高橋さんが現役の頃、特に困ったことがあまりなかったということでしょうか。

そうですね。それと日本のプロ野球というのは、少しあやふやな部分のあいまいさというか、それで守られているところもあったりするんですよね。

そこがよかったと言うわけじゃないんですけども、まだまだ自分の成績で評価を得ていけばいいんじゃないかと暗に考えていたんだと思います。本当だったら自分をもっとうまく評価してもらえるものもあったかとは思いますが、自分の中でまだまだ現実的じゃない部分が多かったんだと思いますね。

—— 日本の野球界は家族経営感が強いですか。

そうですね。家族経営であるからこそ、守られている部分もあるんです。お互いが顔を見て話し合うので、たぶん情も出てくるんですよね。その情がいいのか悪いのかは微妙なところだとは思いますが。メジャーリーグは、契約関係をきっちりやる分、ドライじゃないですか。それはいい部分も悪い部分も両方あるとは思いますが。

—— メジャーリーグの選手と比べると、代理人に依頼するプロ野球選手が少ないというのは、そういった慣習や感覚が一般的ということでしょうか。

まず、アメリカではいろいろな条項があり過ぎて難しいというのがあると思います。たぶん選手たちも代理人が必要だということも含めて勉強しているのだと思います。日本のプロ野球選手は、選手のうち何人が契約書をしっかりと読んでいるのかもわかりませんので。

それと、プロ野球ではまだまだ代理人制度が文化として根付いてないと感じます。プロ野球に入る最初の段階で代理人が付いている状況で契約する選手は

ほとんどいないから、代理人文化が根付かないのだと思います。メジャーリーグでは、ルーキーのような早い時期から代理人がいますからね。

—— 今は、プロ野球で代理人がつくケースはフリーエージェントで移籍する場合だけというのが多いような気がします。

そうですね。プロ野球では、ポスティング等のイレギュラーな形で移籍する場合以外は、そのチームに何年間か在籍するのが通常です。当然毎年契約更改もあるでしょうが、大きな契約内容の変更をすることがあまりないからかもしれないですね。

弁護士からみて、労力と報酬が合わないということもあるかもしれない。実際、全部の試合を見てもらうのは無理ですからね。本来はプロ野球選手にとって代理人がいた方がいい場面はたくさんあると思いますが、一方で越えないといけないハードルがまだまだあると感じます。

—— 今後の夢はなんですか。

僕らが生きてきた野球界は、求められること、必要とされることが何より肝要となる世界だと思います。僕は野球にずっと携わってきている人間ですから、またその野球界から求められることが一番の評価だと思うので、またそこの世界に必要とされる、求められるということが大事だと思いますし、そういった生き方をしなくちゃいけないと思っています。

現場にいるときは、本当に広い目で見たいつもりですが、狭い世界しか見られてなかったなというのを感じていますし、今、一步引いたところから見ることで、これからは気持ちも改めて生きていくことができると思います。

プロフィール たかはし・よしのぶ

1975年生まれ。千葉県出身。桐蔭学園高校－慶應義塾大学。
1997年読売ジャイアンツ入団。2004年アテネ五輪日本代表。
2016年から2018年まで読売ジャイアンツ監督。2018年から
同球団特別顧問。